



もどかしい季節

## 1. 新しい生活

---

三月の合格発表のときは、受験勉強からの解放されたことの方が嬉しかった。もちろん「落ちたらどうしよう」という不安がないわけではなかったが、だいたい高校受験は中学の成績順に受験校を割り振るので、まず落ちることはないのである。「あ、合格したか」くらいの、むしろ当たり前のような感覚だった。

それよりはこれから始まる高校生活への不安の方が大きかった。合格したのは喜ばしいことだが、これから通う北岡高校は県下でトップクラスの進学校で、勉強へのプレッシャーは今まで以上になることは確実だった。

合格発表の一週間後には教科書の配布と説明会があった。入学式の翌々日にはさっそく実力テストが実施されると聞き、いきなり学校へ行くのがイヤになってきた。少女漫画だと高校生活はかなり華やかで楽しいものようだが、やはり現実は厳しいようだ。変な期待などしないほうがいい。進学校は大学受験のためにあるのだ。

四月五日に高校の体育館で入学式が行なわれた。このあたりの中学の精鋭たちばかりが顔をそろえているわけで、館内にはきまじめな雰囲気漂っていた。誰も彼もがみんな、すごく頭が良さそうに見える。同じ中学から進学した松井みどりと秋本舞の姿を見かけたときは、敵地で味方に出会ったような気持ちになった。

「みなさんは選ばれたエリートなのです。そのことをしっかり自覚して三年間勉学に励んでもらいたい」 校長の祝辞はそんな言葉で結ばれた。エリートって、と奈緒はこっそり笑ってしまった。しかし列席している来賓や先生たちは至極真面目な顔をしており、居並ぶ生徒の中にも、頬を紅潮させてうなずいている者もいた。そういう学校なんだ、と改めて思い、馬鹿に見えないように口元を引き締めて背筋を伸ばした。

そして予告通り七日には実力テストが行なわれた。まだ何も始まっていないのに、もう何かを試されている。馴染みのない寒々とした教室で、空っぽの気持ちを持って余した。

翌日の放課後、隣の二組の教室からみどりがやってきた。ちなみに奈緒は三組、舞は一組で、教室は横一列に並んでいる。

ひとしきり、テストの結果について話していると、そうそう、とみどりが思い出したように言った。

「部活、どこに入るか決めた？」

まだ何も考えていないと答えると、ちょっとほっとしたような顔をして

「あたしは、新聞部に入りたいんだよね」と切り出した。「でも一人じゃちょっと怖いから、つきあってほしいんだ」

「新聞部かあ。面白そうだな」

「ね？ だから舞も誘って一緒に行こうよ」

三人なら心強い。舞にも声を掛けて、新聞部の部室へ行くことにした。

新聞部の部室は、本館三階にある。準備室程度の狭い小部屋だ。

緊張しつつ部室へ行くと、二年生の男子が二人いた。彼らは谷村と保科と名乗った。

みどりが代表して入部希望であることを告げる。すると二人は嬉しそうな顔になった。

谷村が言うには去年までは部員が三人しかいなかったらしい。

「後一人は女子で川村さんっていうんだけど、今日は来てないんだ」

「川村さんは怖いんだよ」

保科がぼそっとつぶやく。

「……怖いんですか？」

舞がおそるおそる聞き返すと、保科はにやっと笑って「うそうそ」と言った。

「こいつのいうことは真に受けない方がいいよ」 谷村がおかしそうに笑ったので、ようやく雰囲気はほどけた。

「けっこう狭いんですね」

奈緒が部屋を見まわしながら言うと、

「三人しかいなかったから、そんなに狭くも感じなかったな」

と谷村は意外そうに言った。

部屋の真ん中に大きな机が一つあって、まわりには小ぶりの書棚やカラーボックスなどが雑然とおかれている。窓がひとつしかないので薄暗かったが、それは決して陰気な感じではなく、むしろ秘密の隠れ家のような雰囲気すら感じられた。

新聞部とはいったが、その主な活動は一学期に一回くらいの割合で「北岡」という小冊子を発行することだった。生徒会の機関誌が前身なのだそうだ。

その日はとりあえず仮登録ということにしておいて、部室を後にした。

階段を降りながらみどりが「なんか面白そうじゃない」と言う。

「先輩が少ないっていうのは気が楽かも」

奈緒もその意見には賛成だった。「入っちゃう？」

「いいかもしれない」

と舞が即答したのには意表をつかれたが、「だって保科先輩って面白くない？」と言う発言にはもっとびっくりした。舞でもそんなこと言うんだ、と意外に思ったからである。

入学して最初の一週間はとても長く感じられた。毎日毎日、新しいことに会う。授業はいきなり本格的に始まるし、予習や宿題が山のようにある。ただ教室にいて、座っているだけでも緊張するのは、まわりが知らない顔ばかりだからだ。誰も彼もが緊張してバリアを張り、そのくせお互いを値踏みするような、様子をうかがうような雰囲気になっている。休み時間に隣のクラスをのぞき、みどりと話をするときだけが気を緩められるひとときだった。

電車やバスを乗り継いで登校するのも、疲労の一因だった。いろんなことがいっぺんに変わってしまい、奈緒の中身は全然変わっていないのに周囲が要求するレベルだけが勝手にあげられてしまったような気がする。毎日家に帰るとくたくただった。

土曜日に来て、半日で家に帰ったときには心底ほっとした。やっと一週間が終わった。明日は休みだ。昼まで寝てやろう。

いやいや、そんなことをしていたら予習をやる時間がなくなってしまう。今日のうちに少しでもやっておこうか。そんな殊勝なことを考えていたのだが、結局本屋へ行ったりテレビを眺めているうちに夜になってしまった。

翌日の日曜日も、家でごろごろしているうちに終わってしまった。しなくてはならない予習がたくさんあったのだが、半分くらいしか手をつけられず、おなかがちりちりするような焦りに襲われる。なんとかしなくては、と思っても圧倒的な眠気が打ち寄せてきて抵抗できない。最後は「もういいや」とあきらめてベッドに潜り込んでしまった。

週明けの月曜日。また一週間が始まるなあ、と朝から教室でぐったりしていると、舞がドアから顔をのぞかせて奈緒を手招きした。

「なに、どうしたの？」

「今、谷村先輩と保科先輩が来て、今日放課後部活があるから来てって」

「あ、そうなんだ。じゃあ、今日正式に入部することになるのかな」

「たぶんね。今日は顧問の先生も来るって言ってたよ」

「わかった、ありがと」

どうなるんだろ、と少しわくわくしたおかげで、その日の授業はなんとか乗り切ることができた。

放課後三人でおそろおそろ部室へ向かうと、そこにはすでにたくさんの人間が集まっていた。机を囲んで「ぎっしり」という感じで座っている。一人の女生徒が「なんか、息苦しいね」と手で顔をあおいでいた。先生は部室の奥で腕組みをして立っていた。

「あれ、五組の担任だよ」

目顔で先生を指してみどりが小声で教えてくれた。

「たしか佐藤っていうんじゃないかな」

「へー。みどり、よく知ってるね」

「入学式の担任紹介のとき、なんか感じ悪かったから覚えてんだよ」

入学式のときにそんなことがあったことすら、奈緒は覚えていなかった。

「あんたたちが最後かな。適当に座って」

谷村は適当に座れと言ったが、空いている席はきっちり三つしかなかった。三人でこそこそと並んで座る。

「これで一応全員なのかな。まあ後から来たならそれはそれとして。じゃあ、新聞部の部会を始めます。今日はまず自己紹介からやろう。えっと、僕からいきます。えー、谷村昌男です。今年の新聞部部長をやります」

「よっ、部長、カッコいい」

保科がヤジを飛ばした。谷村は軽く保科の肩にパンチを入れた。「次はオマエな」

「あ、俺は保科」

「保科は光っていうかカッコいい名前なんだよ」

谷村が仕返しのようにそう言うと保科は「うるせ」と照れくさそうに笑った。

奈緒の隣で舞が「かっこいい」と小さくつぶやく声が聞こえた。

「私は川村景子と言います」 さっき「息苦しい」と手で顔をあおいでいた女生徒が言った。小柄で少し神経質そうな感じがする。谷村は真に受けなくてもいいと言ったが、保科が「怖い」と言うのもわかる気がした。

一年生も順番に自己紹介した。奈緒たちの他に、加藤正子、奥村このみ、石原貴子の女子三人と、鈴木令二、沢井涼、吉田稔、松本和樹の男子四人である。

「で、最後になったけど、こちらが顧問の佐藤先生。一年五組の担任をされてるんですが、誰か五組の人いる？」

「はい」と松本が手を上げた。

「そうなんだ」となぜか谷村は含み笑いをした。佐藤は、「よろしく」とだけ言ってまた腕組みをした。

「去年は僕たち三人だけだったから、今年はたくさん入部してくれて嬉しいです。」

そのあと一呼吸置いて、

「今年は仕事が楽になりそうだ」と笑った。

「けっこう大変なんですか」

さっそく鈴木が質問した。目元と口元に生意気そうな雰囲気を感じさせている。

「うーん、そうでもないけどね。でもそれなりにやることはあるから」

「保科君はいつもなにもしないんだけど」

景子が横目で保科をにらむと、保科はニヤニヤと笑った。

「保科は遊び要員だから」

「遊び要員ってことはないだろ、ちゃんとやるときはやるよ」

「そうだったかな」

谷村と保科はそんなやりとりを楽しそうにしている。

「先輩たちってすごく仲よさそうだね」「うん。なんか壁があって、はいりこめなさそう」

舞は不服そうな口ぶりである。

「そんなことまだわかんないよ。今日が初日なんだから」

みどりが大人びた口調でなだめた。

「今は、新学期発行の『北岡』制作中ですけど、今日は初回だし、顔合わせってことで、いいですか？先生」

谷村は最後を佐藤に向けて言った。

「間に合うのか？」

「ハイ、大丈夫だと思います」

「じゃあ、今日はこれで終わりにしよう。なるべく早く帰宅するようにな」

佐藤はそう言って部室を出て行った。あまり部活動に熱心ではないのかな、とちらっと思った。

「さー、帰るかー」「次は木曜日にやるからね」「はい」「オッケー」

ガタガタと椅子を鳴らして立ち上がり、口々に話しながら学校を出た。

春先の暖かい日で、柔らかい日差しが降り注いでいた。

「そうだ、みんな、ちょっと公園へ寄っていかない？」

谷村が言い出して、みんなで近くの公園へ向かった。ゆるやかな斜面に作られた公園には、クローバーが絨毯のように広がっていた。

「気持ちいいな。そうだ、鬼ごっこしようぜ」

保科の提案で突然鬼ごっこが始まった。鞆をブランコの柵の根本に集めて、わーっと走り出す。言い出しっぺなのになぜか保科が鬼になっていた。けっこう走るのが速いので、みんな真剣に逃げ惑っている。奈緒もみどりも、興奮してキャーキャー騒ぎながら走り回った。保科に捕まった舞が妙に嬉しそうな顔をしていた。

やがて走り疲れて鬼ごっこは終了した。いつのまにかみどりと正子は鈴木と話し込んでおり、谷村と景子と沢井はブランコに乗っている。奈緒は松本と吉田の三人で四つ葉のクローバー探しに夢中になった。このみと貴子はブランコの柵にもたれて話している。

奈緒は高校に入って初めて「楽しい」と思った。

## 2. ハートのクリップ

---

「奈緒、部室行こ」

木曜日の放課後、みどりが誘いに来た。舞も呼びに行っ、三人で連れ立って部室へ向かう。

「生徒手帳っていつもらえるんだっけ」

「来週じゃなかった？」

「なんですぐくれないのかねえ」

がらんとした階段に声が響いた。

部室の戸を開けて中に入ると、正子とこのみと貴子がすでに来ていた。机の角を囲んで座り、何かしている。

「なにしてんの？」

さっそくみどりが声をかけた。

「これ？ クリップでハート作ってんの」

「あ、それ、作り方知ってるんだ？ 教えて教えて」

机の上には銀色のクリップが散らばっていた。正子はその中から一つ取り上げると器用にクイッククイッと曲げて小さなハートを作った。

「ここのカーブと、このカーブをハートのふくらみのところにするわけ」

「なるほどー」

みどりはさっそくクリップを手に取った。奈緒も真似してやってみる。正子は実に簡単そうに作っていたのだが、実際にやってみると思いの外難しかった。どうやってもハートの形にならない。

「えー、できないよお、どうやるんだっけ」

情けない声で正子に助けを求めていると、舞がすっとハートを作って奈緒に見せた。

「簡単じゃん」

「あれー、おかしいなあ、なんでできないんだろ」

「だから、ここを、こうやって」「こう？」「違う違う、こっち」

などとわいわいやっているところへ一年男子の四人が一緒にやってきた。

「なにやってるの」

鈴木がめざとく見つけて声をかけてくる。

「クリップでハート作ってるんだ」

「どれ」と松本が奈緒の手からクリップを取り上げる。

「ああ、確かにこれはハートじゃないな」

「それはまだ試作品なの」

恥ずかしくて顔が赤くなるのがわかる。奈緒はこういうことが実は苦手なのである。

「僕もやってみよう」

吉田と沢井が二人でやり始めた。その手元を見るともなく見ていると、みどりが

「なに、見とれてんの」

と肘でつついてきた。見とれてるわけじゃないよ、とモゴモゴと言い返ししながら、でも沢井君の指ってきれいだなあ、とこっそり思っていた。

そんなことをしているうちに、二年生の三人がやってきて部会が始まった。

奈緒は中学の時に学級新聞を作ったことがあったが、そのときはガリ版刷りの簡単なものだったので、本格的な編集の仕事について話を聞くのは初めてだった。それは他の部員たちも同じだったようで、真剣な顔つきで谷村の話を聞いていた。

新学期に出す「北岡」は先生たちの異動のニュースがメインである。校長先生の巻頭言はもらったが、離任、新任、転任の記事はまだ出来ていないという状態だそうだ。

「まだ全然わからないと思うから、僕たちがやってるところを見てほしい。簡単な作業なら手伝ってもらおうから、だんだんに仕事を覚えていってください」

最後に谷村がそう言って、話し合いは終わった。

ほっとした雰囲気がただよい、みなてんでにしゃべり始めた。部室の中がざわめきで満たされる。奈緒はようやく一つできたハートをセーラー服の胸ポケットにつけてみた。なかなかかわいい。これを生徒手帳に並べて二つつけるような時が、はたして訪れるのだろうか。

「ところで、このハートっていうのは、なんの意味があるんだ？」

松本が今頃気づいたかのように言った。

「松本君、知らないの？ これ、片思いだと一つ、両思いだと二つ、生徒手帳につけるんだよ」

鈴木が得意げに教えている。

「へえ。恋愛宣言みたいなもんなんだな」

「恋愛宣言って」

松本の大げさな言い方がおかしくて奈緒とみどりは顔を見合わせて笑った。そのときふと目の端に、舞の姿が見えた。舞は保科にクリップを手渡している。あれ、と一瞬思ったが、すぐに話に引き戻されてそのまま忘れてしまった。

部室を出た一年生はひとかたまりになってバス停まで歩いた。

「なんか飲まない？」

みどりが言った。「のど渴いちゃった」

「俺もなんか腹減ったな」

「じゃあ、ここ、寄ってく？」

鈴木がバス停の前にある店を指さした。そうしようそうしようと思いがまとまり、「みやび」という古びた看板のある店に入ることになった。正子とこのみと貴子はそのままバスを待つというので、彼女たちとはそこで別れた。

「みやび」というのは、どこの学校の近くにも一軒はある何でも屋である。パンやおにぎり、お菓子、ジュースなど高校生が欲しがりそうなものはたいてい置いてあるし、店の奥では、焼きそばやお好み焼きを食べることもできる。夏にはかき氷、冬にはおでん、と至れり尽くせりの店なのだ。

「あたし、コーラにしよっと」

「みどりはいつもコーラじゃん」

「コーラ最高だよ」

みどりは中学の時からコーラが好きで、一年中コーラを飲んでいる。その飲みっぷりはほれぼれするくらいで、強い炭酸飲料が苦手な奈緒はいつも見とれてしまう。

舞と同じグレープのチェリオを買った奈緒は、ちびちびとそれを飲んだ。男の子たちは大量のパンを買い込んで食べている。

「そういえば来週服装検査があるよね」

一気にコーラを飲み終えたみどりが思い出したように言った。

「あー、そうだった。やだなー、何するんだろ」

北岡高校は、男子が詰め襟の学生服、女子はセーラー服が制服である。入学前の説明会の時に、かなりうるさくその規定について説明されたのを覚えている。髪の毛の長さや靴下などにも細かい規定があった。違反した者についてはそれ相当の処分が下ることもあると脅されて、奈緒は心底震え上がった。高校は義務教育ではないから、停学とか退学などという恐ろしげな措置がある。奈緒にとって停学や退学という処遇は、完全に世間から脱落していく大きな落とし穴のようなものだった。もしそんなことになったら人生終わりだと思う。いくら学校や先生に対して反感を持って、実際に楯突くような行動はとれるわけがなかった。

「奈緒は大丈夫だよ。まじめそのものだし」

舞がなだめるように言った。

「むしろあたしの方がやばい」

奈緒は舞の全身にすばやく視線を走らせた。染めているわけではないのにきれいな栗色の髪がさらさらと肩の辺りで揺れている。セーラー服のリボンは少し小さめで丈も若干短い。スカートは膝下ではなくふくらはぎのあたりまで延びている。

「舞のスカートっていつからそんなに長かったっけ」

「高校入ってから。なんか長い方がラインがきれいじゃない？」

「にしては長すぎだよ」

「うん。明らかに違反してる」

舞は自分のスカートをつまみあげた。

「わかってやってるんだ」

「そりゃあそうだよ。まあ、検査の時は巻き上げるつもりだけどね」

「あたしは鞆がやばいかも」

みどりが自分の鞆を持ち上げて見せた。革の学生鞆が、本来の厚みの半分以下になっている。

「だからって、今更戻せないもんねえ」

「そういうのは自分でやるの？」

パンを食べ終えた吉田が興味津々という顔で聞いてきた。

「自分でやる人もいるよ。でもあたしは知り合いに頼んでやってもらった」

「ちょっとみせて」と鞆を受け取り、左見右見し始めた。「ふうん、すごいもんだな」

その様子を見ながら、「男子は問題なさそうだね」

鈴木と沢井が顔を見合わせてうなずいていた。確かに新聞部一年男子は全員校則どおりの服装をしているようだった。

「男子はまじめだねー」

みどりがからかうように言うと、鈴木が「校則違反なんて無駄だよ」としたり顔で言った。「学校ともめるなんて百害あって一利なし」

それはそうだ、と奈緒も思う。みどりや舞は脱落の落とし穴が怖くないのだろうか。「なんで服装検査なんかするのかなあ」　ようやく飲み終えたチェリオの瓶をもてあそびながら、奈緒はぶつくさ文句を言った。　店のおばさんに、口々にごちそうさまーと声をかけながら外に出ると、柔らかい夕暮れの光があたりに満ちていた。ふんわりとした空気の中にひやりとした風が混じる。春なんだな、とふと思った。

### 3. 中間考査

---

戦々恐々として待っていた服装検査は、結局行なわれなかった。たぶん新学期で先生たちに余裕がなかったのだろう。日を改めて行なうことになり、数日後に担任が簡単に見て回るだけで終わってしまった。みんなの予想どおり奈緒はまったく問題なしだったが、舞はスカートの長さで注意されてしまったと後から聞いた。一番怖い生徒指導の先生が、「次は厳しくやるから」と言ったとか言わないとか、そんな噂も流れた。

わかっていたことだが、勉強は大変だった。

中学までは、国語、数学、英語、社会、理科の五教科だったが、高校ではそれがさらに細分化された。国語は現代国語と古文・漢文、英語はリーダーとグラマー。社会は地理、世界史、日本史、政治経済、倫理社会。理科は生物、化学、物理、地学。ただし政経と倫社、化学は二年になってからだし、物理と地学は理系選択者のみである。数学は教科書を使った授業の他に、スタンダードという問題集を使った授業もあった。これはひたすら問題を解き続けていくという授業なのだが、当然時間が足りない分は自宅学習になるのである。予習だけでも膨大な量になるのに、さらに宿題も出る。現国や数学はチャート式問題集というものまである。まったくうんざりだった。

下旬になって、入学してすぐに行なわれた実力テストの結果が公表された。テストは基本的にはいつも順位が発表される。特に実力テストの場合は、百番までの上位成績者の氏名が張り出されるのである。番付表と呼ばれるそれに、なんと奈緒の名前が載っていた。みどりや鈴木の名前もあったが、奈緒はなにより自分の順位に驚いた。思っていた以上の結果で、嬉しいというよりも不安の方が大きかった。最初にいい成績を出してしまうと、それを維持しなくてはならなくなる。

とりあえずがんばろうと思った。次の実力テストは六月の中頃の予定だったからまだ時間はある。それよりも先に中間考査があるので、そろそろ取りかからないと間に合わなくなる。早めにやっておくに越したことはなかった。

勉強の合間に新聞部の部誌を書くこともあった。部内の交換日記のようなもので、順番にノートを回しているのだ。他の人が書いたものを読むのは楽しかったし、自分のところへ回ってくれば、延々とノートを埋めた。

今や奈緒の人間関係のほとんどを新聞部が占めていた。みどりととは特につきあいが深くなった。中学の時はさほどでもなかったのだが、高校に入ってからのはなにかにつけてみどりとつるむようになったのだ。舞もよく一緒にいるけれども、なんとなく中学のときとは感じが変わってしまい、ついていけないと思うことも増えてきた。男の子たちとはいい感じで仲間意識が芽生え始め、仕事も遊びも一緒にすることが多くなった。

笑ったり怒ったり落ち込んだりしているうちに、季節は進んでいった。

いつの間にか桜が終わり、校庭のまわりには緑のアーケードができています。天気がよければ外へ出てみんなで校内をうろついてみたり、卓球やバスケなどをして遊んだり、時間を忘れて話し込んだりした。もちろん「北岡」の仕事も手伝った。まるで遊びの合間に「北岡」を作っている

ようだった。

五月の連休には、みんなで映画を見に行った。友達と映画を見に行くという経験は初めてのことで、少し大人になったような気がした。

毎日が飛ぶように過ぎていく。

中間考査まであと一週間となったころ、朝、始業前に図書館で勉強しようという話が持ち上がった。メンバーは奈緒、みどり、沢井、鈴木、吉田の五人である。舞も誘ったのだが、「あたしはいいや」とあっさり断られてしまった。

その日はいつもより早い電車に乗って、まだ空いているバスで学校へ向かう。ちょっと早いだけでも空気が違う気がして新鮮だった。

「おはよ。昨日どれくらいできた？」

バスの中でみどりがあくびをかみ殺しながら聞いてきた。

「うーん、けっこうがんばったよ。家に帰ってすぐに寝て一時に起きたんだ。それからずっと朝までやってた」

「へえー、すごいじゃん。眠くない？」

「あんまり眠くない、かな。ラジオ聞きながらやってたんだけどさ、朝の早い時間のラジオって別世界だよ」

「ああ、中学のころに聞いたことがある。トラックの運転手さんとかが聞いているような番組やってるよね」

「そうそう。後は英語の番組もやってた」

「それ、知ってる。あれ聞くと、すごく勉強したくなるんだよね」

「うん。なんか不思議な気分だった」

バスを降りると始業までにあまり時間がないことがわかり、二人で走り出した。

図書館につくと、もう男子三人は席について参考書を開いていた。

「おはよー。早いね」

あわてて鞆の中から教科書とノートを取り出して席に座りながら奈緒が言うと、「当然でしょ」と鈴木に一言で切り捨てられてしまった。

「朝はそんなに時間ないんだから」

暗に自覚が足りないと言われていたようで、ちょっとへこんだ。落ち込みつつ、教科書のまとめの続きを始める。 あっという間に時間が過ぎ、始業の鐘が鳴った。

ある日の夜、奈緒は自分の部屋で数学のチャートと格闘していた。まるで暗号としか思えないような数式の連続に、脳みそが悲鳴を上げている。

「なんでこんなに難しいんだ」

ついに鉛筆を放り出し、椅子に寄りかかって天井を見上げた。

こんなことしてなんになるんだろ。本当にあたしはあの学校についていけるのだろうか。

さらさらと問題を解いていく吉田の姿を思い出した。鈴木と松本が古文の解釈についてあれこ

れ言い合っている姿も浮かんだ。それから、沢井の姿も。

沢井の様子を思い出すと、なぜか落ち着かない気分になった。

部室で、先輩の仕事を手伝っていたとき、沢井ははさみで割り付け用の記事を切り抜いていた。そのときの彼の横顔。細くしなやかな指先。

みんなで雑談していたときに、部室の隅に置いてあったギターを弾いていたこともあった。奈緒はギターを弾いている人を初めて間近で見たので、つい見とれてしまった。「かっこいいね」と言ったら「簡単なコードくらいなら教えてあげるよ」と言ってくれた。

そういえば少し前に朝、学校まで歩いたときに道路の向こう側にいたことがあったっけ。あたしが合わせて歩いていたのに、「歩くの速いね」って言われた……。

なんでこんなこと覚えてるんだろう。なんで沢井君のことが気になるのかな。

「もしかして、好き、とか？」

わからなかった。好きなのもかもしれない。

その日は部活もなく、放課後の図書館でも会えなかった。帰り道、なんだかやけに沈んだ気持ちになって、みどりに心配されてしまった。どうしたんだと聞かれ、説明するのもイヤで黙り込んだまま電車で揺られていた。

悲しかった、のかな。いや、つまんない、と思ったんだ。

なんでつまんないって思ったんだろう。それは……。

「あー、もうやめ。こんなこと考えてもしょうがないや」

胸の中がもやもやして苦しくなってきたので、無理矢理自分にそう言い聞かせた。

とにかく今は勉強するしかない。中間の結果が悪かったら、最初の実力テストの順位はまぐれだと思われてしまう。それだけは避けたかった。

「先にグラマーやっちゃおうかな」

苦手なものばかりやっていると、余計なことは考えるしやる気も失せてくる。奈緒はチャートを乱暴に閉じてかわりにグラマーの教科書を開いた。

今夜も朝までやれるだろうか。

十九日から中間考査が始まった。四日間の日程である。その間授業はなくて午前中で終わる。そこが中学との大きな違いであった。しかも、テストが終わるとすぐさま教室の後ろの掲示板上に解答が張り出されるため、テストの出来具合が即座に判明してしまうのだ。

初日は英語のグラマーと現国の二教科だった。英語と国語はわりと得意だから、と余裕で望んだ奈緒だったが、張り出されたグラマーの解答をみてショックを受けた。一問、全滅の問題がある。他にもいくつかミスを発見してしまった。どうしよう、と顔から血の気がひいた。

部室でみどりと一緒にお弁当を食べながら、奈緒はついつい愚痴ってしまった。

「たしかに難しかったよねえ」

「でしょ？ けっこうイケたと思ってたからさあ、すごいショック」

「現国は？」

「うーん、たぶん大丈夫だと思うけど、自信なくなってきた」

「ま、過ぎたことを悔やんでもしょうがないよ。明日がんばろ」

うなずきながらも奈緒はまだくよくよと思い悩んでいるばかりだった。

毎日のように図書館に通っていたが、結局しゃべってしまったり、たいして効果のあがらないようなやり方でしか勉強できなかった。家に帰って勉強するつもりだったのに、どうしてもやる気が出なくて、テレビを見てしまったり、漫画を読んでしまったりして時間を無駄にしていた。沢井のことをぼーっと考えていたこともある。

「もうだめかも、あたし」

「なに弱気なこと言ってんのよ。あたしだってグラマー全滅だったよ」

みどりがなぐさめるように言った。

「明日はなんだっけ、生物と古典か。奈緒、全部やった？」

「まだに決まってるでしょ。これからやるんだよ」

「あたしも。今夜は徹夜かな」

ふたりで顔を見合わせて、あーあ、と大きなため息をついた。

連敗はダメージが大きい。

奈緒は、自分が高をくくっていたことを痛烈に思い知らされていた。

進学校のレベルは、ちょっとやそっとの勉強量では太刀打ちできないのだ。生物のテストではいくつも空欄を残してしまったし、古典は訳を忘れてしまったり、単語を思い出せなかったりした。

あまりのできなさに愕然とする。いったいどうしてしまったんだろう。三日目はリーダーと家庭科である。家庭科はいいとしても、リーダーはなんとかしなければいけない。その日は部室には寄らずにまっすぐに帰宅した。

夜、自室で気合いを入れて机に向かったが、構文を覚えようとしていたら猛烈な眠気に襲われた。並んでいる単語が意味不明の暗号に見えてくる。ぱらぱらとページの先の方をめくると、大きなため息が出た。これ、今夜中に終わるのだろうか。ぼんやりノートを眺めていたらだんだんどうでもいいような気持ちになってきた。実力テストより悪い成績を取りたくないと思っていたが、あまりのめんどくささに、赤点さえ取らなきゃいいか、という捨て鉢な気持ちがあわさってきたのだ。やりかけのノートをぱたんと閉じて、そのまま寝てしまった。

案の定、リーダーのテストはさんざんな出来だった。家庭科のどうでもよさが逆に救いになるくらいだった。

その日は部室へ寄ってみた。鈴木と松本がいたのでしばらくしゃべっていたが、やはり明日のことが気になるので帰ることにした。校門のところで松本と別れ、奈緒は鈴木と同じバスに乗って駅へ向かった。鈴木とは途中まで電車が同じなのである。

バスの座席に座ってぼーっと外を眺めていると、横に立っていた鈴木がふいに、

「磯山さんって、いつも沢井くんのこと見てるね」

と言ってきた。とっさのことでどういう反応をしていいのかわからず、へどもどしていると、なにやら一人納得した風に「大丈夫、誰にも言わないから」とうなずいている。

「そんなに見てる？ あたし」

「まあ、そうだね。男子で気づいてるのは僕だけかもしれないけど」

「サワさんは？」

「どうかなあ。たぶん気がついてないと思うよ。あの人はそういうことには疎い感じだから」

「だよね」

沢井が「そういうことには疎い」というのはよくわかる感じがした。感覚的にはまだ中学生、いやもしかしたら小学六年生くらいの心の持ち主なのではないか、とさえ思うことがある。

「でもさ、まだ自分でも好きなのかどうかわかんないんだよね」

バレてしまったついでに、鈴木に内心を打ち明けてみた。「だからよけいに誰にも言わないでほしいんだけど」

「わかった」

「もうすぐ『北岡』が完成するね」

照れくさくなって話を変えた。

「うん。今回でだいぶやり方はわかったからね、次からは僕たちも主戦力になれると思うよ」

「男子は頼もしいね」というと、「磯山さんたちだって同じだよ」と真顔でたしなめられてしまった。

#### 4. 四つ葉のクローバー

---

土曜日、四日間の中間考査が終わり、とりあえずテスト勉強の重圧から解放された。

「やったー、終わったー」

部室に行っているいつものメンバーでお弁当を食べながら、久しぶりにのびのびした気持ちになれた。「北岡」は週明けには印刷所から戻ってきて全校生徒に配布される予定になっている。当面すべき仕事はなかった。

「卓球やりに行こう」

お弁当を食べ終わった谷村は、保科に声をかけて部室を出て行った。舞がその後ろを追いかけしていく。あれ？と思っているとみどりが近寄ってきて、小さくため息をついた。

「舞、ちょっと変わったよね」

「あ、やっぱりそう？」

「舞がどこで勉強してたか知ってる？」

知らないと言っていると、

「ここでやってたんだって。保科先輩と」

「え、ここで？」

思わず机を見つめてしまう。

「だから図書館来なかったんだ」

「そういうこと」

いつのまにそういうことになっていたんだろう。そういえばゴールデンウィークにみんなで映画を見に行った時、舞はずっと保科の隣にいたことを思い出した。今までに見たことのないようなぴかぴかした顔をしていたっけ。

「あとで、舞の生徒手帳と保科先輩の生徒手帳見てみな」

「なんで……あ、ハート」

重要な証拠であるというようにみどりがうなづく。

「そうかあ、そんなことになっていたのかあ。気がつかなかったなあ」

「奈緒は鈍感すぎだよ」

——いや、あたしだってうすうすは感づいてたよ。でもまさかと思ってたんだ。

「舞はかわいいからいいよね。お似合いだよ」

「まあそうだけどさ。ちょっと恋に走りすぎな気もする」

女は恋をすると友情を捨てるというのが、舞もそうなのだろうか。でもそれも無理はないと奈緒は思う。

「ねえ、バレーやりに行かない？」

部室を出ようとしていた鈴木が声をかけてきた。

「あ、やるやる。奈緒も行こうよ」

みどりはすぐに腰を上げたが、奈緒は手を振って断った。

「バレーは手が痛くなるからいいや」

みんなが出て行ったあと、奈緒は一人で四つ葉のクローバーを探しに行くことにした。一年生の校舎の脇に群生しているところがあるのだ。

部室を出て人けのない階段を降りる。自分の足音がぱたんぱたと響き、遠くの方できれぎれに人の声がある。まだ馴染みの薄い校舎が、よそよそしい空気で迫ってくる。中間考査が終わって、とりあえず目の前のハードルは飛び越えたが、これからも次々と新しいハードルが現れてくる。三年間、ずっと飛び続けなくてはいけないのだ。できるかな、と思うと、足下が抜けていくような不安な気持ちになった。

四つ葉のクローバーは、どういうわけか大量に見つかった。かたまって生えていたようだ。みんなに分けてあげようと思って、たくさん摘んで部室へ戻った。

卓球チームはすでに部室に戻ってきていて、三人でしゃべっていた。そういう目で見てみると、確かに舞は保科の顔ばかり見ているような気がしてくる。がんばれ、舞、と心の中で声援を送る。

四つ葉を人数分に分けていると、バレーチームも戻ってきた。みんな汗びっしょりである。額の汗を拭いている沢井を見ていると、なぜか胸が騒いだ。

「四つ葉のクローバーをたくさん見つけたから、おすそわけ」

おー、すごいね、といいながらみんなが寄ってきた。

「人からもらったのじゃ、いいことは起こらないかもしれないけどね」

そんな言い訳をしながら配ったのだが、沢井がその四つ葉を丁寧に手帳にはさみながら「気がつかないだけかもしれないよ」

と微笑んでくれた。「そうかな」と何気なく受け流したけれど、嬉しかった。そういう考え方をする沢井がいいなと思ったし、なにより手帳にはさむ手つきがほんとに優しげだったからだ。

## 5. 球技大会

---

六月初めの金曜日と土曜日にかけて球技大会が行なわれた。クラス単位で、バスケットボール、バレーボール、ソフトボール、卓球、テニスの五種目から好きな競技を選んで参加する。試合のないときは他の試合を観戦していればよかった。

金曜日は快晴だった。太陽は夏の予告編のようにまぶしく、夏本番のように暑かった。

奈緒はクラスメイトと一緒にバレーボールに参加した。あまりバレーボールは好きではないのだが、女子はみなバレーボールがいいと言ったので仕方なかったのだ。

バレーボールの試合は外で行なわれた。体育館はバスケットボールで使っていたからだ。参加人数によって試合数にばらつきがあり、テニスとバレーボールはさほど多くなかったので、二面あるテニスコートの一つがバレーボールの試合に使われることになっていた。プレーするたびにザッザッと砂を掃く足音がして、白い砂埃が舞い上がった。

午前中の試合が一つ終わり、次の試合まで時間が空いた。がんばってレシーブした手首がじんじんしびれている。

体育館脇の冷水器で水を飲んでいると沢井がやってきた。

「あれ、サワさん、試合終わったの？」

「うん。とりあえず次の試合まで時間があるんだ」

沢井のクラスの男子はソフトボールを選んだそうだ。

「サワさんはどこやるの？」

「外野」

「かっこいいね」

何気なく言った奈緒の言葉に、全然そんなことないよ、と沢井は照れたように笑った。

「卓球、見に行こうか」

「うん。そうだ、舞は卓球なんだって」

「じゃあ、応援しないと」

並んで武道場まで歩いた。校内のあちこちで競技が行なわれ、声援や歓声が響いている。青い空にそれが吸い込まれていく。つかの間だけど勉強から解放されるのは気持ちがいい。「磯山さんは何に出るんだっけ」

「バレーボール。今一つ試合やってきたけど負けちゃったよ」

「そうなんだ」

「バレーは手が痛くなるからイヤなんだよねー。赤くなっちゃったよ」

手首をさすりながらぼやくと、ずっと沢井が手首を持って「ほんとだ」と言ったのでドキドキしてしまった。

体育館裏手にある武道館の入り口で靴を脱いで中に入ると、たくさんの生徒が試合を見ていた。いつもは剣道部や柔道部が使っている館内に卓球台が置かれ、白熱した試合が展開されている。

「あ、舞だ」

ちょうど舞が試合をしていた。いつもはおろしている髪を後ろで一つにまとめているので、ほっそりした首筋が見えている。舞は苦戦しているようだった。

「舞、がんばれ」

試合の邪魔にならないように小声で声援を送る。舞の姿が見える場所へ腰を下ろして膝を抱えた。混雑しているので隣に座っている沢井の肩と奈緒の肩がくっついてしまう。そこに神経が集中しないように、意識して舞の方を見ていた。束ねた髪がしっぽのようにはねるのを見て、思わず「舞はかわいいなあ」とつぶやくと、沢井にそれが聞こえたのか、奈緒の方に顔を向けて「秋本さんが？」と確認するように言った。

「うん。かわいいよね」

「そうかな」

「そうだよ、かわいいよ」

少しむきになってそう言うと、もう一度「そうかな」とつぶやいた。

「かわいって。スタイルいいし。いいなあ」

なぜ沢井が舞のかわいさに同意しないのかわからなかった。そのあとも何度か「かわいいなあ」と繰り返していると、やがて沢井が「磯山さんだってかわいいよ」と言った。

「なんだか、無理矢理言わせたみたいな気がする」というと、沢井は横を向いて笑った。

試合は接戦の末、なんとか舞の勝利で終わった。奈緒が舞に手を振ると、舞も嬉しそうに手を振った。

舞の試合が終わったので、今度はテニスの試合を見に行った。

コート脇に立って見ていると、日差しがじりじりと腕を焼いていくのがわかる。

六月一日から衣替えになり、体操服も半袖にした。もちろん今日の暑さにはそれは正解だったのだが、いかんせん日差しが強すぎた。

奈緒が半袖から出ている腕をこすりながら「焼けちゃうなあ」とぼやいていると、「これ、着る？」と着ていた長袖の体操服を脱いで奈緒に貸してくれた。沢井は半袖の体操服の上に、冬用の前ファスナーの体操服を着ていたのだ。

「サワさんだって焼けちゃうよ」

「大丈夫、大丈夫」

せっかくの好意なのでありがたく体操服を拝借することにした。袖を通してると、たまたま通りかかった先輩の川村景子に「あらあら、仲のいいこと」とからかわれてしまった。浮ついた気持ちのままに「いいでしょー」と返す。

コートに向こう側でしきりに写真を撮っている松本の姿が見えた。腕に「新聞部」という腕章をつけている。

「松本くん、すっかりカメラマンだね」

「がんばってるなー」

ふたりして手を振った。松本も大きく手を振り返す。ついでにカメラをこちらに向けて構えたので、あわてて沢井から離れた。

「どうして離れるの？」

「だって一緒に写ったら困るでしょ」

「何で？ 別に困らないよ」

「そう？」

沢井の無邪気さに便乗して、さりげなく沢井に少し近づいた。胸がどきどきした。

その日の帰り部室に顔を出すと、一年男子と、みどりと舞がいた。今日の結果について話しているうちに「北岡」の話になった。

「各学期に一回しか発行しないなんてつまらないよね」

いかにも物足りないという感じでみどりが言う。それは奈緒も思っていた。

「こないだの『北岡』は手伝いだけで終わっちゃったもんね」

「もっとやりたかったな。次は二学期でしょ。それまでにもっと出せばいいのに」

すると鈴木が言った。「そうもいかないらしいよ」

「なんで」

「さあ、まあ、予算の関係とかいろいろあるみたいだよ」

「ふうん」

みどりは不満そうに鼻を鳴らした。

「予算といえば、今日明日で撮る写真の現像代はどこから出るんだ？」

松本が思い出したように聞いた。

「とりあえず自腹だって」

「えー、そうなのか。そりゃ厳しいな」

「写真部に知り合いがいるから頼んでみようかな」

と吉田が言ったので、松本はすかさず頼み込んでいた。

翌日もいい天気だった。

奈緒のクラスは結局一勝四敗で終わってしまった。その後は、他の試合のラインズマンをやったり、他のクラスの試合を眺めていたりしたが、だんだん退屈してきた。

そういえば今日はまだ沢井の姿を見ていない。

昨日のように体育館脇の冷水器で水を飲んでみたが、何も起こらなかった。

思いついてグラウンドへも行ってみたが、そこにも沢井の姿はなかった。試合が終わってしまったのか、まだなのか、それとも誰かの試合を見に行ってしまったのだろうか。誰かに聞けばわかるのかもしれないが、そこまですることもないか、とあきらめる。

急に景色が色あせたような気がした。

その日も部室に顔を出した。今日はいつものメンバーの他に二年生三人も来ていた。

「先輩。『北岡』は各学期に一回発行って決まってるの？」

みどりが昨日出た話を先輩の谷村に聞いた。「増刊とかはだめなのかな」

「だめっていうか、予算が下りないんだよね」

「学校の新聞部なのに？」

「まあ、仕方ないけどね。今まで部員も少なかったし、目立った活動もなかったから。今年度の予算もけっこう減らされてるんだよね」

谷村の言葉に鈴木がうなずきながら付け足した。

「だから二学期まで待たないといけないってわけ」

「でもそれだと、松本君たちが撮った写真は二学期まで置いておくことになるよ」

「そうなるね」

「もったいないよ、せっかく撮ったのに。こういうことって速報性が大事じゃん」

「たしかにね。それに『北岡』にだと一枚か二枚くらいしか使えないんだよね」

「えー」と声を上げたのはもちろん松本である。「そりゃあ厳しすぎるよ」

谷村は申し訳なさそうな顔をした。「ページの関係でどうしてもそうなっちゃうんだよ」

「だったら壁新聞作ればいいじゃん」

みどりが思いついたように言った。

「そこへ直に写真を貼り付けてしまえばけっこう使えると思うんだけど」

「ああ、それはいいかもしれないね」

どうせ次回の『北岡』発行まではすることがないのだ。みな一応に乗り気になった。

「じゃあ、それぞれ自分の参加した種目に関して、感想とか観戦記みたいなのを書こう。写真はどうする？」

谷村に聞かれて吉田が「一応写真部の知り合いに頼んでみようかなと思ってるんだけど」と答えた。

「そうか、じゃあ、それで頼むよ」

「模造紙はどうしよう」

「事務室へ行けば、たぶんそれくらいはくれると思うよ」

「じゃあ、今から行ってもらってくるよ」

みどりは張り切って部室を出て行った。しばらくして、丸めた模造紙を持って走って帰ってきて「よーし、やるぞー」と机の上に広げた。

## 6. 壁新聞

---

壁新聞を作ることになったのを、正子たちにも伝えておかななくてはいけない。

週明け月曜日の休み時間に、奈緒は正子を呼び止めた。

「あのさ、こないだ決まったんだけど、球技大会の壁新聞作ることになったんだ」

「え？ そうなの？ いつ部活あった？」

「ないけど、土曜日集まってしゃべってたらそういうことになったんだ。で今日からやるから、加藤さんたちも来て」

正子はなんとなく面白くなさそうな顔をしていた。

「ごめんね、なんかそういう話が盛り上がっちゃって。このみちゃんと貴子ちゃんにも言っと思ってくれないかな」

「……うん」

——勝手に決めたのはまずかったかな。

ふと冷たい風が吹いたような気がした。

放課後部室へ行って、記事の分担を決めていたが、正子たちはなかなか来なかった。おまけに吉田も来ない。どうしたんだろうと噂しているところへ、ようやく吉田が顔を出した。

「遅いじゃん、吉田くん」

「ごめんごめん。写真部へ行って現像頼んでたらなんか入部することになっちゃって」

「写真部なら現像しまくりだな」

松本はちょっと羨ましそうだ。「松本君も入れば」などと吉田がけしかけるように言う。

「で、写真はいつできるの？」

「明日にはできるって」

「じゃあ、担当種目を決めよう」

あたしはバレーがいい、いやバスケだソフトだと言いあっているところへ正子たちがやってきた。気のせいか硬い表情をしているように見える。しかしそう思っているのは奈緒だけのようで、みどりはさっさと彼女たちにも分担を割り振った。舞は保科と一緒に組みたがったので、二人で卓球を担当してもらうことにする。聞けば保科は舞の試合を観戦していたのだという。

「あのとき、保科先輩もいたんだね」

「ああ、そういえばいたね」

奈緒は気づかなかったが、沢井は保科がいることは知っていたという。しかし、単に同じ部員だから応援しているだけだろうと思っていたらしい。

自分の出た試合は当然のこととして、それ以外にも見て回った試合について結果を集計して表にすることにした。

奈緒はソフトボールの担当になった。沢井と一緒にいる。嬉しいような困ったような、そわそわと落ち着かない気分になる。

翌日、吉田が現像の終わった写真を大量に持ってきた。一気に机の上に広げる。

「うわー、けっこう撮ったねえ」

「あ、これ、先輩が写ってる」「変な顔～」「笑うなよ」などなど言いたい放題である。

写真の中に沢井の姿が写っているものがあつた。思わずどきっとしてしまう。写真の中の沢井は端正な横顔をしていた。

——この写真、欲しいな。吉田君に頼んでみようか。

そんなことを頼んだら変に思われるだろうか。写真選びもそっちのけで、奈緒は一人悶々と考え込んでしまった。

学校生活はいくつものパーツでできあがっている。登校時間、授業、テスト、放課後、部活、などなど……。壁新聞作りはそのパーツの中の一つに過ぎない。そこにいるときは楽しいけれども、別のパーツにいるときはまた違った感情に支配される。

球技大会の一週間後にまた実力テストがある。今回は中学の余力では太刀打ちできないことはわかっていたので、頭の隅にいつも「勉強しなくちゃ」という思いがこびりついていて。思いがあることと、それを実行できることの間には、はかりしれない距離がある。クラスメイトとはまださほど親しくなっていなかったのだから、あまり打ち解けた話はできず、つつい部室に入り浸って、みどりに愚痴をこぼすことが多かった。

奈緒の愚痴を黙って受け止めてくれるみどりは、本気で勉強に取り組んでいるらしかった。一日にやることをきっちり決めて、毎日それをこなす。「言うは易く行は難し」だが、みどりはそれをやっていたのだ。奈緒だってそうしなくてはいけないとは思っているが、それを実行する気力が圧倒的に足りない。

「すごいな—みどりは」

ついうらやむような口調になる奈緒に、「だってやらなきゃしょうがないじゃん」とあきらめたような返事を返す。

「大学、いいところへ行きたかったら自分がやるしかないんだよ」

まったくそのとおりなので、返す言葉がなかった。

一方舞は、暗かった中学時代を取り返すかのように、恋に夢中になっていた。いつの間にか保科と一緒にいることが多くなり、朝二人で図書館にいた、とか、日曜日に一緒に出かけた、という話を聞くことが多くなった。沢井への曖昧な気持ちに振り回されている奈緒にとっては、羨ましい反面、時にうっとうしく思えることもあり、最近は少し距離を置いてしまっている。

壁新聞を作っているときも、舞は常に保科の近くにいる。

あるとき、用があると行って保科が先に帰ったことがあつた。みんなはまだ作業中だったが、舞は作業を途中で放り出して、保科の後を追って帰ってしまった。

一応「ごめんね」とは言い置いて行ったものの、心ここにあらずなのは目に見えていて、残った部員たちはしらけた雰囲気になった。

「恋をすると女は変わるねえ」

舞が出て行った後を見ながら、みどりはあきれたようにため息をついた。

「どうすんの、これ。」

卓球の欄が書きかけのまま放置されている。

「恋をするのもいいけどさ。責任はちゃんと果たしてほしいよね」

まったくだ、と思ったけれど、あそこまで純粋になれる舞が少し羨ましかった。

実力テストの日、やはりみんなで部室に集まっていたが、その日は仕事に取りかかる気分になれずになんとなく雑談していた。

「テスト、どうだった？」と誰かが口にしたけれど、誰も答える者はいなかった。一つ一つのテストに一喜一憂してもどうにもならないし、他人と比較しても仕方ないということが少しずつわかってきていたのだ。テストはずっと続く。授業と同じように、当たり前に行なわれるものなのだ。「それよりさ」

みどりが雰囲気を変えるように発言した。「生徒手帳にすごく笑える校則があったよ」

「なにそれ」

「えっとねえ。男女交際についての校則なんだけど、その文章が可笑しいんだよ」

「どれどれ」と吉田が生徒手帳を広げて該当項目を読み上げた。

「男女交際はお互いの人格を尊重し、知性と良識のある清純なものとする。なんだこれ」

読み上げた吉田が吹き出した。

「ね？ 笑えるでしょ。清純ってなによ、清純って」

「つきあったら校則違反になっちゃうのかな」

「いや、だから、知性と良識を持てばいいんだって」

「知性と良識ってなによ」

「さあ、わかんないけど。不純異性交遊はいけませんってことなんじゃないの」

みんなで口々に好き勝手なことを言い合っていた。奈緒はふと思いついて沢井に聞いてみた。

「サワさんって、誰か好きな人いるの？」

聞いてから自分の大胆さに驚いたが、沢井の答えを聞いて軽いショックを受けた。

「いないよ。っていうか、そういうことにはあんまり興味ないな。今は友達と遊んでる方が楽しいよ。彼女とか、つきあうとか、めんどくさそうだもん」

「へー、そうなんだ」と気の抜けた返事をするのが精一杯だった。

そうかあ、サワさん、彼女作らない主義なのかあ。

奈緒の学校生活の一つのパーツがさーっとモノクロになったような気がした。

沢井がそういう考えでいても別に奈緒には関係ないといえば関係ないのであるが、球技大会以降に、いやもしかしたらその前から、そこはかたなく感じている沢井への感情を、いったい心のどこに片付ければいいのかわからなくなってしまったのだ。好きなのか、いや好きとか恋とかそういうのではないのだ、ただ気になる、というこの感情。話ができればやけにうきうきしてしまうし、他の女の子と楽しそうにしていたり、誰それがかわいいとかいうような品定めをしていれば心が騒ぐ。そんなこちら側のもやもやした思いも、沢井に受け入れる余地がなければただの空回りだ。もう沢井のことを気にするのはやめよう、と奈緒は思った。

それぞれの思いを抱えつつ、壁新聞作りは着々と進んでいた。

土曜日。奈緒が部室に顔を出したときは、川村景子と、みどり、沢井、鈴木、松本の五人がいて、お弁当を食べていた。奈緒も一緒にお弁当を広げる。

その日は蒸し暑く、窓を開けていてもほとんど風が通らなかった。

「暑いわねー」

景子が手で顔を仰ぎながらぼやく。

「もう梅雨入りしたんだっただ？」

「さあ、どうだったかな」

「まだ、じゃない？」

「でももうすぐだよ」

ぽつん、ぽつんとそんな会話が行き交う。

「なーんかやる気出ないから、ちょっと体を動かしてこない？」

お弁当を食べ終わった鈴木が立ち上がってそう言うと、みどりと松本が賛成して一緒に部室を出て行った。

景子と沢井はピアノの話をしている。奈緒はお弁当を食べながらなんとなくそれを聞いていた。

「沢井君も、ピアノやってるの？」

「中学までね。今はギターの方が面白くなってきてるけど」

「音楽好きなんだね。音楽部に入ればいいのに」

「川村先輩は音楽部にも入ってたんだっけ」

「うん。楽しいよ。沢井君も入れば？」

「どうしようかな」

サワさん、音楽部に入るのかな。入ったらこっちに来なくなるかもしれないからつままないな。奈緒はぼんやりそんなことを思っていた。

ふと沢井が奈緒の方を向いて、

「磯山さん、オセロしない？」　　と言った。

じゃんけんで白と黒を決める。沢井は白になった。緑色の盤の上で、白と黒の駒が何度も反転する。やっているうちに、白と黒が並んだ瞬間があった。

「なーらんだー、なーらんだー」

と小さく口ずさんでいると、沢井も同じように歌っている。

嬉しくなって一緒に歌っていると、景子が「なに仲良く歌ってんの」とひがんだ。そのうちに「あ、ほら、黒はこっちに置いた方がいいって」とか「あー、だめだめ、そんなとこに置いちゃ」などと口出ししてくる。

「邪魔しないでよお」と奈緒が口をとがらせると、嫌味っぽく「はいはい」と立ち上がり、「二人で仲良くやってて」と言い捨てて部室を出て行ってしまった。

その後ろ姿に、ふざけて「邪魔者は去れ！」と言ってやる。

しかし、いざ沢井と二人きりになり、部室にオセロの駒を置く音だけが響くようになると急にどきどきしてきた。邪魔者って、言っちゃった。まるであたしが二人きりになりたがってるみた

いじゃん。そう思うと顔をあげられなくなり、必死で白っぽい盤面を見つめることしかできなくなかった。何か言わないと。変な雰囲気になっちゃう。

「ギター」

「え？」

「ギター、教えてくれるって言ってなかった？」

「そうだっけ？ でも、いいよ。磯山さん、ギター好きなの？」

「弾いたことないけど。弾けたらいいな一、なんて」

「じゃあ、今度簡単なコード教えてあげるよ」

「わーい。ありがと。絶対だよ」

こうやってしゃべっていると、やっぱり楽しいのだった。沢井の声や話し方は柔らかくて心地いい。オセロの駒をつまむ沢井の細くて長い指先をずっと見ていたくなる。

もう少しこのまま二人きりでいたい、と思ったのもつかの間、どやどやとみんなが戻ってきて、壁新聞作りの追い込みが始まった。

全員で机を囲み、最後の仕上げをする。マジックのキュッキュツという音や、鼻を刺激するシンナー臭、「ハサミ取って」「こっち、写真はがれかけてる」「糊、どこ？」などの飛び交う会話。つかの間、嫌なことや面倒なことを忘れて、作業に没頭した。

ずっとシンナー臭を嗅いでいた奈緒は気分が悪くなってしまい、しばらく部室の隅で休むことにした。

「大丈夫？」

沢井が心配そうにのぞきこんでくる。

「うん、たぶん。しばらく座ってれば治ると思う」

気持ち悪いのと嬉しいのが混じって、わけがわからなくなる。あんまり優しくされると好きになっちゃうのに。そういうのは困るのに。そんなことを考えていたらさらにわけがわからなくなった。

学校を追い出されるぎりぎりの時間まで粘って、ついに壁新聞が完成した。

「やったー」

言い出しっぺのみどりが一番嬉しそうだった。谷村は離れたところから新聞を眺めて、

「うん。なかなかいいね」と満足げに言った。

「月曜日に掲示板に張ろう」

## 7. 水を求めて

---

朝一番で谷村が壁新聞を掲示板に張った。昼休みには放送部がそのことを放送してくれた。景子が頼んだらしい。宣伝の甲斐あって、放課後にはたくさんの生徒が壁新聞の前に集まった。たくさん写真を張ったのがよかったようで、かなり好評だった。滅多に部室に顔を出さない顧問の佐藤が、その日は部室にやってきてひとしきりみんなの健闘をたたえたが、釘を刺していくことも忘れなかった。

「部活動を熱心にやるのもいいが、勉強も忘れないようにな」

はい、と返事はしたものの、しらっとした空気が流れるのは否めなかった。そんなことは言われなくてもわかっている。あと二週間ほどで期末テストが始まるのだ。またテスト勉強に追われる日々がやってくる。

壁新聞作りが終わってしまったので、当面新聞部ではすることがなくなった。次回の「北岡」は二学期の発行である。少しずつ企画を考えようというあたりで話は止まっていた。

ある日、部室にいるのもかかったらかったので、みどりと一緒に校内を歩き回ることにした。だいたい学校にも慣れてきて、よそよそしさも薄れてきている。

「暑いねー」と言い合いながら歩いた。サージのスカートが足にまとわりつく。生徒たちから「便所スリッパ」と呼ばれているゴム製のスリッパをぺたぺた鳴らしながら階段を降りた。やがて話題はそこにいない舞のことになった。

「舞は保科先輩とうまく行ってるのかな」

「そうみたいよ」

「みどりはそういう人いないの？」

みどりは階段の途中で足を止めて、しばらく考え込んだ。

「うーん、どうなのかな。よくわかんないんだよね、そういうの。今は勉強で手一杯な感じで、そこまで余裕がもてないんだよ」

「やることいっぱいあるもんね」

「そういう奈緒はどうなのよ。サワさんとか気になるんじゃないの？」

今度は奈緒の足が止まった。

「気になる、ことは気になるよ。でもさ、いつだったかサワさん、彼女作らない主義だって言ってたことがあって、あれ聞いてからなんだかモヤモヤしてる」

「ふうん。難しいね」

難しい。そう、難しいのだ。沢井の考えていることがわからないし、実を言うと自分の気持ちもよくわからない。彼が話しかけてくれれば嬉しいし、機嫌が悪いのか知らん顔されるとどんよりと気持ちが沈む。気持ちの上下が苦しくて、いっそ嫌いになってしまおうと思う時もあるのだが、そんなときに限って一緒に遊んで楽しい思いをしたり、優しくされたりしてしまうので、困ってしまうのだ。

「喉渴いたね。どっかに冷水器なかったかな」

職員室の前に一台置いてあるのを奈緒が思い出し、とりあえず水を飲みに行くことにした。一

階の職員室は、窓が開け放たれて、ざわついた雰囲気だった。別に悪いことをしているわけでもないのに、なんとなく身を低くして前を通り過ぎる。

喉が渴いたと言ったみどりに先を譲る。みどりは冷水器のペダルを踏んで、吹き上がる水を口に含んだ。

「ぬるっ」

二口くらい飲んで、顔をしかめる。どれどれ、と奈緒も飲んでみたが、水というよりお湯に近いくらいのぬるさだった。

「ここさあ、みんなが飲むから冷える暇がないんだよ、きっと」

みどりの指摘もまんざら外れてはいない。二人が飲んで場所を空けると次々に通りかかる生徒が水を飲んでいく。

「やっぱ、使用頻度に比例して温度も上がるんだねえ」

「じゃあさ、あんまり使ってないところなら冷たいんじゃない？」

「そうかも」

「よし、それ探しに行こうよ」

なまじぬるい水を飲んでよけいに喉の渴きを意識したのか、みどりが俄然やる気を出した。「他に冷水器あるとこ、知ってる？」

「えーと。体育館前と、渡り廊下と、一年の校舎の入り口と……、あとどこだっけ」

「グラウンドの近くにもあったよね。あ、あと用務員室の入り口」

とりあえずそれらを全部回ってみることにした。

職員室からいちばん近いのは用務員室なのだが、二人の予想ではそこがいちばん冷たいのではないかということになったので、後回しにして、次に近い渡り廊下へ向かう。

渡り廊下というのは、本館と別館をつなぐ廊下なのだが、別館にあるのは化学室や美術室などなので、さほど生徒が利用しない場所なのである。

しかしその日は暑かったせいか、けっこう利用されたようで、思ったほど水は冷たくなかった。みどりの評価は「職員室前よりはマシ」であった。

そこから廊下を戻って体育館へ向かう。そこは案の定水がぬるくなっていた。部活の生徒が頻繁に利用するからだろう。体育館の中をのぞいてみると、バレー部とバスケット部が汗を流していた。

「運動部は大変そうだよねえ」

奈緒がしみじみそう言うと、みどりは顔をしかめた。

「あたしは全然運動だめだから、高校で厳しい練習をしようってヤツの気が知れない」

「それはまあ、あたしもそうだよ。だから新聞部に入ったんじゃない」

「まあそうなんだけどさ」

体育館の横にはテニスコートがある。先月の球技大会で沢井が体操服を貸してくれたことをふと思い出した。胸の奥がチクツとする。それを振り払うように

「次はどこだっけ」とあえて明るい声を出した。

「ここまで来るだけでなんかへばったよ」

とみどりが泣き言を言うので、一番最後に行く予定だった用務員室前の冷水器へ向かった。本館の奥に位置する用務員室へ続く短い廊下の入り口に冷水器がある。あたりには人の気配がなく、そこだけ隔絶された世界のように思えた。

「ここ絶対冷たいよ」

みどりは期待に満ちた声で冷水器に駆け寄り、すぐさまペダルを踏んだ。

「——つめたーい！」

まるで悲鳴のように叫ぶ。急いで奈緒も飲んでみた。水が薄い氷の膜のようになって喉を滑り降りていく。あまりの冷たさに眉間の奥がつーんと痛くなった。

「ここ穴場だね」

みどりが嬉しそうに言う。「みんなには秘密にしよう」そう言っていたはずっぽく笑った。

「グラウンドのやつはどうする？」

「もういいんじゃない？ だってグラウンドのってたしか直射日光当たってたよ」

「そりゃだめだ」

冷たい水が探求心を凍結してしまった。たいした距離ではないが、暑い中校内をうろついていたので少々たびれてしまったのだ。せっかく冷たい水を飲んだのに、また延々歩いてグラウンドまで行く気にはなれない。

「なんか面白かったね」

部室まで戻る道すがら、みどりと今の小さな放浪の旅について話す。

「水を求めて三千里、ってかんじ？」

「それいいね、奈緒、それでなんか書きなよ。で、次の『北岡』に載せよう」

あはは、いいねと受けて、ふとほんとに書いてみようかなと思った。何かしたかった。なんでもいい、何か面白そうなこと。勉強という現実から逃げられるならなんでもよかった。

本当は逃げていてはいけないのだ。みどりは口では全然だめだよと言うけれども、実はこつこつと努力できるタイプの間人だ。中学で一緒だったからよく知っている。実力テストも、常に上位三十番あたりをキープしている。まぐれで一桁取った奈緒とは違うのだ。

奈緒は高校に入ってからどんどん自分の嫌なところが出てきているような気がしていた。ここの一番でがんばれない怠け心。やらなくちゃ、といいながら、最後で逃げてしまう弱い心。家で机に向かっていると、この先の人生が真っ暗なもののように思えてくることがあった。こんな駄目な自分、こんな弱い自分が、この先ちゃんと社会に出てやっていけるのだろうか。やってもやっても減らない問題集を、ぱらぱらとめくる。無機質な数字が淡々と並び、見ているだけで口の中が乾いた紙のような味になる。いったいこの数字たちは何を言ってるんだろう。「解きなさい」って何をどうすることなんだ。あるいは、少しクリーム色がかった用紙にずらずらと書き連ねられた文字たちは、何を語っているというのか。

もうだめだ、もういやだ、と放り出しては、でもあとちょっとだけがんばってみるか、と気を取り直す。毎日がその繰り返しだった。学校での日々が、オートメーションの工場で作られる製品のように、いろんなことがどうでもよくなってしまいうこともあつた。

沢井と話した、沢井が冷たかつた、沢井の姿を見かけた、そんな些細なことで心が揺れるのも

癢だった。いっそのこと、心が凍ってしまえばいいのにとすら思う。

舞の存在もまた、奈緒の心をざわつかせる一因だった。

中学の時はひどく神経質でピリピリしている子だった。受験のころにはノイローゼのようになってしまったこともある。合格してよほど安心したのだろう。一気に弾けてしまったように見える。いつの間にか先輩の保科と一緒にいることが増え、奈緒たちとは別行動になることが多くなった。たまに一緒に遊ぼうとしても、まず保科のことを優先しようとするので面白くないのだ。新聞部に来るのも保科に会うことが第一義になっているようで、保科が来ないときは舞もさっさと帰ってしまったりする。

あんなふうに恋に夢中になればどんなにいいだろう、と思う。そう思う反面、恋におぼれてしまうなんてつまらないとも思う。なんだかひどく平凡でありきたりな感じがする。

奈緒は「非凡」であることにあこがれているのだ。がむしゃらに勉強なんかしなくても、なんとなくテストでいい点が取れてしまうとか。何かはわからないけれども人々の耳目を集め、ちやほやともてはやされてしまうとか。そんなことを夢想してしまうから、勉強に集中できないのだった。

なにをどうしていても時間は流れる。七月に入ってまもなく期末テストが始まった。

相変わらず図書館で勉強したり、時には部室で宿題をやったりしながら、中間テストの時ほどの緊張感もなくテスト期間を終えてしまった。

期末が終われば、二週間ほどで夏休みがやってくる。

七月も半ばになってようやく夏らしい日が増えてきた。期末テストも終わって、校内にはだれた雰囲気漂うようになった。短縮日課になったので、午後からは部室に入り浸る日が増えた。

土曜日の午後もそんなふうに過ごしていた。暑かったのもまた冷水器めぐりをしようともどりが言いだし、その日は珍しく舞も一緒に行くことになった。

「あれ、いつだっけ。みどりと二人でさまよったんだよね」

「あー、あったねえ。期末の前だっけ。あの時も暑かったんだよね。今日もあそこがいちばん冷たいかな」

みどりが言っているのは用務員室前の冷水器のことだろう。

「たぶんそうなんじゃないかな」

「どこ？」

「用務員室前のやつ。あんまり人が来ないからだと思うんだけど、すごく冷たいんだよ」

「そうなんだ」

そう答えた舞の声が、心なしか元気がないような気がした。

「舞、今日は珍しいね。保科先輩と一緒にじゃなくていいの？」

「……うん、いいの」

階段のてすりに手を這わせながら、舞はぼつんと言った。「もうだめかも」

思わず奈緒はみどりと顔を見合わせてしまった。

「なんか、あったの？」

おそろおそろ聞いてみる。

「別に……」

またしても顔を見合わせる。みどりが（ほっとう）という表情をした。ちょうど職員室の前に着いたので、「ねえねえ、一応ここのも試してみようよ」と話をそらした。相変わらずこの水はぬるい。きっと冷える暇がないのだろう。

舞は冷水器のペダルを踏んで水を出しっぱなしにしたまま、ぼんやりと吹き出す水を見つめている。

「舞？」

「あたしがくつつきすぎるのかなあ……」

ふいに舞がつぶやいた。一口だけ水を飲み、「ほんとだ、ぬるい」と微笑んだ。

「あたしね、どうしても毎晩電話しちゃうんだ。邪魔になるかもって思うんだけど、一人でいると寂しくてたままない気持ちになる。保科先輩の声を聞けばちょっとは落ち着くんだけど、このごろ先輩がいやがってるんじゃないかって思えてきて……」

「毎晩、電話してんの？」

「奈緒、そこじゃないでしょ」

みどりに突っ込まれたけれど、奈緒はそこそが大きな問題だった。家に電話するなんて、誰が出るかわからないのに、すごく大胆だと思った。そのことを言うと舞はなんでもないことのように言った。

「かける時間を決めとくの。で、その時間には絶対電話の前にいるようにしてんの」

——は一、そういう手があるのか。

奈緒は感心してしまった。しかしその前に、電話をかける時間を示し合わせるような間柄になっていることがうらやましかった。

「でも先輩はちゃんと電話に出してくれるでしょ。だったらいいじゃん」

「そうなんだけど……、最近口調が冷たい気がするの」

「気のせいじゃない？ いつも保科先輩は舞に優しいじゃん」

みどりはそう言って舞をなぐさめていたが、奈緒はだんだん面白くなくなってきた。そんなことでうじうじ考えるなんて、ぜいたくすぎる。

「だったら、あんまりかけないようにすれば」

つきつい言い方をしてしまった。舞は「そうなんだけどさ」と口をとがらせた。

そんな顔をして舞はかわいい。その顔を見ているのが苦しくなって、

「あたし、先に部室に戻ってるね」

と言い捨てて身を翻した。みどりの困ったような顔が気になったけれど、気持ちを抑えることができなくなっていた。

階段を一段飛ばしで駆け上がる。舞もみどりも自分も大嫌いだと思った。なにがどう嫌いなのかもわからなかったけど、嫌いだ嫌いだと胸の奥で叫びながら階段を上がっていった。

三階に着く前の踊り場まで来たとき、上の方から正子たちの声が聞こえてきた。

今、あたしはすごくみっともない表情をしている。それを見られたくなくて足を止めた。少

しゅっくり階段を上る。切れ切れに正子たちの会話が聞こえる。ふと、胸がずきんとした。なんとなく嫌な感じがする。今、「松井さんたちが……」と言わなかったか？

そっと足を進めて、様子をうかがう。

廊下を歩いている正子とこのみの姿が見えた。

「あたしたちも、もうちょっと仕事をさせてほしいよね」

「いつも勝手に決めてどんどんやっちゃうでしょ。」

「なんか、その他大勢みたいに扱われちゃうのはすごくイヤな感じ」

「いっぺん、佐藤先生に言ってみようか」

そう言いながら二人は部室へ入っていった。

足が床に張り付いたようだった。心臓がバクバクしている。なに、あれ。あたしたちのこと、言ってる？ どうしたらいいのかわからなくなって、その場に座り込んでしまった。

そんなふうに思われていたのか。一緒にがんばっていると思っていたのに。

確かに、奈緒たちは男子四人組と仲がいい。帰りに一緒に街まで出て、ハンバーガーやポテトを食べながら延々としゃべったり、部室でもトランプやオセロで遊んでいることが多い。壁新聞のときのことを言ってるんだろうか。あれはあたしたちが勝手に決めてしまったことだ。でもちゃんと報告して、一緒に作ったじゃないか。

何をどう考えればいいのかわからなくなった。みどりや舞にも話すべきだろうか。それとも何も聞かなかったことにするか？

もし、みどりたちに言うとしても、今日はいやだった。さっきのことをまだ引きずっていて、話をするのが気まずい。

何回か深呼吸して気持ちを落ち着けて、部室へ向かった。奈緒が話を聞いてしまったことは、正子たちは気づいていないだろう。何もなかったような顔をすればいい。

そう思って部室へ入ったけれど、やはり正子たちを見ると顔がこわばってしまった。心に錘がつけられたように、どんどん沈んでいく。

やっぱりだめだ。とても我慢できそうになかったので、「すみません、先に帰ります」と谷村に告げて、一人先に帰宅してしまった。

## 8. とまどいの中で

日曜日に、ベッドに転がってグズグズと考えているうちに、ふと「退部」という言葉が脳裏をよぎった。

「やめちゃおうかなあ」

いろんなことがひどくめんどくさく思えてならなかった。舞が、みどりが、保科が、正子が、みんなそれぞれの思惑で動いている。当たり前のことなのに、とてつもない疎外感を感じた。つまらない。面白くない。あたしなんかいなくなってしまう方がいいんだ。

そうやって自分をいじめることには、ゆがんだ快感があった。どこまでも自分を追い詰めていく。

期末はさんざんな出来だった。でもそれはある意味当然の結果だったのだ。机には向かっていだし、教科書もノートも広げていたけれども、結局なんにもしないで寝てしまった夜の方が多かった。なんとかなるかも、どうでもいいさの繰り返しだった。こんなことじゃだめだ、お先真っ暗だ、と思うそばから、だったら消えてしまえばいい、とそそのかす声を何度も聞いた。

死んだらどうなるかな。ふとそんなことを思う。もちろん実行する勇気なんてどこにもないのだが、自分が夭折してしまう様子を想像すると、その非凡な感じにゾクゾクした。誰が泣いてくれるだろう。みどり？ 舞？ いや、誰も泣かないかもしれない。「なんて馬鹿なことをしたんだ」と嘲笑されるだけかもしれない。

将来のことを考えると頭が真っ白になる。自分が大人になる、ということがどうにも信じられない。本当に、あたしが、大人になるのかな。なれるのかな。朝、通学のときに乗る電車の中に、たくさんの勤め人がいる。おじさんもお姉さんもみんなすごくちゃんとしてるようにみえる。どこかの会社にお勤めして仕事するなんてことが、本当にあたしにできるのだろうか。本当に、本当に、そんなふうにしてちゃんと生きていくことができるのだろうか。

次第に灰色の大きな不安の塊が押し寄せてくる。重くて息苦しくてぺちゃんこに潰されそうだ。なにが、どう、という具体的なものが何一つないだけに、その不安はとりとめもなく、具体性もなく、ただモヤモヤと膨れあがるだけで、あまりの心細さに涙が出てきた。

ベッドにつっぷしてひとしきり泣いた。泣くのは気持ちよかった。うすら甘い自己憐憫の感情がやさしく心をなでていく。

そうやってしばらく泣いていたが、そのうちに泣いている自分がばからしくなってきた。身を起こしてベッドの上に正座する。まだ残っている涙をわざと荒っぽくぬぐった。

「あほくさ。勉強しよっと」

今、自分がやれることは、やらなくちゃいけないことは、これだけなのだ。

机に向かってチャートとノートを広げ、シャープペンシルをカチカチ鳴らす。「よし」と小さく気合いを入れて、しばらく奈緒は勉強に没頭した。

一晩眠れば気持ちも変わる。翌月曜日、朝の電車でみどりに会ったときには、ふつうに話すことができた。「ちょっとさあ、部活のことで話があるから、部室へ行く前に教室へ来て」「い

いよ」 いぶかしげな顔をしながらも、みどりは深く追求しないでくれた。

放課後、奈緒が教室で帰る支度をしていると、みどりがやってきた。

「なに？ 部活のことって」

「うん。あのさ、土曜日にちょっと聞いちゃったんだけど、正子さんたちが、あたしたちに不満を持ってるみたいなんだよね」

「どういうこと？」

みどりが不思議そうに聞く。

「不満、っていうか、もっと仕事させてほしいとか、男の子たちとわーっとやっちゃうとか、その他大勢にされちゃうとか、そんなこと言ってたんだよね」

「えー、なにそれ」

「あたしもちらっと聞こえただけだから、詳しいことはわかんないんだけどさ。佐藤先生に言ってみようかなんて言ってたから」

そうだ、奈緒が焦ったのは、正子たちがこのことを顧問の佐藤に言おうとしていたからなのだ。そんなふうには告げ口されたら、自分たちが悪者のように思われてしまわないだろうか。奈緒はもっぱらそのことばかりが気になっていたのだが、みどりは違うことが気になったようだった。「仕事させてほしいって、あたしたちが決めてるわけじゃないし、誰もその他大勢になんかしてないと思うんだけどな」

「あたしもそう思うんだけどね。でもなんかそう思われてるみたい」

「ふうん。そうなんだ」

「なんかさあ、そんなふうには思われてるのかと思ったら、やめたくなっちゃったよ」

すとんと椅子に腰を下ろして奈緒はつぶやいた。

「えー、もうやめちゃうの？ まだ一学期しか経ってないんだよ。『北岡』だってまだまともに作ってないのに」

「そうなんだけど……」

「早すぎるって。もうちょっとがんばってみようよ。ほら、夏休みに入ると高校野球の取材とかもあるじゃん。あたし、あれやってみたいんだよね」

「あー、そうか、それもあるね」

新聞部に入りたいと言いだしたのはみどりだっただけに、彼女にはやめる気はなさそうだった。

「正子さんたちがどう思ってようと、あたしたちには関係ないよ。先生に言って仕事が増えるなら言えばいいんだし。っていうか、そんなの自分たちでがんばればいいのにさ」

「みどりはすごいね」

思わずそう言ってしまった。みどりはすごい。勉強だって部活だって、前向きに努力することができるのだ。

「あたしなんか、全然だめだよ」

「なに言ってんの。そんなことないって。奈緒もがんばってんじゃん」

みどりはそう言ってなぐさめてくれたけれども、奈緒の心は沈むばかりだった。どうしてあたしはこんなにだめなんだろう。

「あたし、やっぱ、やめようかな。なんかついていけそうにないよ」

鞆につけたマスコット人形をいじりながら弱音を吐いた。みどりが悲しそうな顔で見ている。しばらく奈緒を見つめてから、ため息混じりに言った。

「どうしても奈緒がやめたいならしかたないけど。でも焦って結論出さない方がいいと思う。とりあえず夏休みの間は休むとかして、また気が変わったら出てくればいいじゃん」

「そうだね」

休部してしまえば、戻るのは難くなるだろう。でも、波風をたてないようにするなら、休部から退部へなだれこむというのも一つの手かもしれない。

「でも、野球の取材、奈緒と一緒にいきたいなあ」

みどりの言葉が痛かった。やめない方がいいんだろうか。でもどんな顔をして部室に入ればいい？

「なんかもうわかんなくなっちゃった」

「とりあえず今日は部室へ行こうよ。まだやめるって決めたわけじゃないし」

「.....うん」

中身が少なくて軽いはずの鞆がやけに重たかった。

部室の戸を開けると、中で一年男子が四人集まってトランプの真っ最中だった。最近新聞部ではトランプが流行っているのだ。

今日はセブンブリッジをやっていた。

みどりはさっそくゲームに参戦したが、奈緒はただ見ているだけにした。トランプに興じる気分ではなかったのだ。

ポンド、チーだとかけ声が行き交い、何度もカードが配られる。何回目かのゲームのときにみどりが、「ほんとに男は信用できないなあ」とぼやいた。配られたカードか、場に出されたカードのことで愚痴ったのだが、それを聞いた鈴木は沢井と顔を見合わせて

「そんなことないよね。僕たちは信用できるもん」

と笑った。沢井は続けて「男と女が信用し合えるわけがない」とつぶやいた。

特に深い意味で言ったのではなかったのかもしれないが、奈緒にはショックだった。

翌日は終業式だった。ついこの間入学式をしたばかりなのに、もう一学期が終わってしまった、という気持ちと、やっと終わったという気持ちが入り交じる。いろんなことがありすぎて、ひどく長かったような、でもあっという間に過ぎたような感じがする。

退部の件はうやむやになってしまった。昨日トランプで遊んでいるうちに、一緒に野球の取材に行くことになってしまったのだ。また勝手に仕事してるって思われなかなあと、行く前から気が重い奈緒である。

地に足が着いていない毎日だったなあ、とふと思う。

これから始まる夏休みの間に、ひとつでも確実な何かを見つけることができるだろうか。

この日は部室には寄らずに、みどりと駅まで歩くことにした。七月の太陽が照りつけるアスファルトの道を、ひたすら歩く。

「暑いー」

「暑いねー」

同じことを何度も言いながら歩いた。

「こんな暑い中を歩くなんて正気の沙汰じゃないね」

「誰が言い出したわけ」「あたしたちだよ」

みどりと顔を見合わせてぷっと吹き出す。

坂の上に来たときに、みどりが足を止めて遠くを見るような目をした。

「先は長いね」

奈緒にはそれが将来のことを言っているように聞こえた。

「気が遠くなるよ。ほんとにやっっていけるのかな」

と答えるとみどりはおかしように笑った。

「駅はそんなに遠くないよ。ちゃんと歩いていけるって」

「あ、なんだ、駅のことか。将来のことかと思ったよ」

「将来、ねえ。どうなるのかねえ」

「みどりでもそんなこと思うわけ？」

「そりゃ、思うよ。まだ一年だけど、受験なんてすぐだし。頭痛いよ」

全然頭なんか痛くないように見えるけど。口には出さずにみどりの顔を見た。汗が光っている。頭が痛いのはあたしだよ。なんにも先が見えない。自分がどうしたいのかも全然わからない。こんな強い光を浴びたら、簡単に蒸発してしまいそうだ。

「ねえ、『ながら』でアイスコーヒー飲んでいこうよ。のど渴いて死にそうだよ」

「コーラじゃないの？」「『ながら』だったらアイスコーヒーでしょう」

そうか、みどりだって、いつもコーラばかり飲んでるわけじゃないんだな。奈緒はふと、夏の白い光の中で方向を見失ったような気持ちになる。

「そういえばさ、こないだ舞がちらっと部をやめたいみたいなこと言ってたよ」

「え？ そうなの？ なんで」

「保科先輩とうまくいってないんだってさ」

足を速めたみどりのあとを追いながら、奈緒は舞のことを思い、沢井のことを思った。そうして、自分の心をのぞきこんだ。

いつも揺れ動く気持ちかもどかしい。チャートには正解があるけど、人生ってやつには答えがあるのかないのか。その答えを探していくのが、生きていくことなのだとしたら。

「やっぱり先は長いよ」

みどりの背中にそう言った。駅も。人生も。先は長い。

(了)

## もどかしい季節

<http://p.booklog.jp/book/39737>

著者：片山るん

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/hyugarun/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/39737>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/39737>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.